

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25年 6月 8日現在

機関番号：33301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：平成21年度～平成24年度

課題番号：21500961

研究課題名（和文） NHKデジタル教材を基盤に据えたメディア教育推進パッケージの開発・評価研究

研究課題名（英文） Development and evaluation research of media education promotion package that laid the foundation the NHK digital material

研究代表者 岡部 昌樹 (OKABE MASAKI)

金沢星稜大学・人間科学部・教授

研究者番号：10319030

研究成果の概要（和文）：

初等教育段階でメディアリテラシーを育成するには、メディアの記号次元とリテラシーの教養次元に焦点を当てた映像教育が有効である。学校現場は、映像リソースに対して常に簡便性と恒常性を希求してきた。そのため、デジタル教材化が進行している学校放送番組の利便性が再認識されてきている。そこで、映像教育の推進にあたって、NHKデジタル教材の活用を基本に据え、自由度の高いパッケージ（能力育成一覧表、記録用定型ノート、児童記録ノート事例、指導ポイントと評価見本）を開発し、授業実践を通して能力目標の妥当性を検証した。

研究成果の概要（英文）：

An image education which focuses on a signal dimension of the media and a cultural dimension of the literacy is effective in order to bring up the media literacy at the stage of primary school education. Simplicity and constancy have been always pursued for the image resources in the scene of school education. Recently, however the usefulness of the school broadcasting programs is realized again as the digital teaching materials. Therefore, we developed a flexible package (a list of ability development, a fixed patterned notebook for noting, some examples of noting for children, the guiding points and some examples of evaluation for teachers) based on the utilization of NHK digital teaching materials so as to improve and enforce the image education, and investigated the validity of the aim of a lesson through the actual school lessons.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
平成21年度	900,000	270,000	1,170,000
平成22年度	1,100,000	330,000	1,430,000
平成23年度	176,850	180,000	356,850
平成24年度	423,150	0	423,150
総計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：

科研費の分科：科学教育・教育工学 ・細目 教育工学

キーワード：メディア教育

1. 研究開始当初の背景

メディア教育がめざすメディアリテラシーの育成に関する研究は、近年盛んになってきている。しかし、多くは、「批判的思考力」の育成をめざす、アメリカ・カナダ・イギリスの理論の紹介とその実践の日本における適応に止まっている。しかし、日本においても極めて類似の概念を掲げた実践が30年近くも積み重ねられてきた。

小学校現場にVTRが普及した1980年代の初頭から、視聴能力の概念が拡大した。これまで映像の「受け手」として、映像理解力の育成に主眼が置かれていたが、映像の「作り手」として自己実現をめざす映像制作能力の育成も試みられるようになった。そこで、映像にかかわる能力を育成するため、小学校1年生から6年生を対象に、我が国で最初の体系的な映像教育カリキュラム（目標体系・指導案・映像カード、評価手法）・パッケージ（100事例）を開発し、1983年にその有用性を実証した。

しかし、能力育成を重視するあまり、リソースが映画や一般放送番組等の多義にわたり、実践は特定地域に限定された。1990年に入るとコンピュータを中核に据えて、情報を一元的に扱うメディア融合が進んだ。ここでは、映像の「使い手」としての活用能力の育成が重視されるようになった。そこで、1997年には、映像活用能力を中核に据えた、小学校低・中・高学年別の新映像教育カリキュラム（目標体系・指導案・映像カード、評価手法）・パッケージ（30事例）を開発し、学会等を通じて普及に努めた。

2000年前後からはメディアリテラシーの育成が唱えられるようになった。そこで、メディアリテラシーの育成に関する実践的な国内外の諸論文を収集・分析した結果、我が

国では、映像教育とメディアリテラシー教育が極めて類似した下位目標を持っていることが明らかになった。

そこで、初等段階でのメディア教育では、メディアの記号次元（主に映像）とリテラシーの教養次元に特化する能力をメディアリテラシー育成の基本（メディア教育）と位置づけ、初等教育用カリキュラム・パッケージを開発・実践・普及させることが我が国のメディアリテラシー育成教育にとって有用と判断した。

2. 研究の目的

初等教育段階でメディアリテラシーを育成するには、メディアの記号次元（主に映像）とリテラシーの教養次元に焦点を当てたメディア教育が有効である（図表1）。

図表1 初等段階におけるメディア教育の射程（A－1分野）

		I 教養	II 機能	III 批判
A	記号	A-I	A-II	A-III
B	装置	B-I	B-II	B-III
C	システム	C-I	C-II	C-III

また、学校現場は、映像リソースに対して常に簡便性と恒常性を希求している。そのため、デジタル教材化が進行しているNHK学校放送番組（主にデジタル教材）の利便性が再認識されてきている。そこで、映像を主な対象とするメディア教育の推進にあたっては、国語科の学習指導要領の能力目標との整

合性を重視し、授業実践を通して自由度の高いパッケージを開発し、データベース化して広くメディア教育を実践する方途に関する情報を提供する。

3. 研究の方法

我が国の映像を中核に据えたメディア教育が目指してきたメディアリテラシーは、3領域（A＝受け手、B＝使い手、C＝作り手）・6能力（理解力、洞察力、探索力、発信力、構成力、創作力）・12視点に整理することができる。各視点の下位目標行動の決定にあたっては、国語科の学習指導要領との整合性に留意して、低・中・高学年別の36パッケージに集約する。

一方、NHK学校放送番組はデジタル教材の内容を中心に分析し、能力育成との整合性を検討して、仮説的パッケージ（学習ノート、指導の手引等）を開発する。

仮説パッケージが出来次第、随時実験授業を試行し、児童ノートの分析と評価、指導上の留意点の確立、授業案の再検討を行う。

並行して、C分野（作り手）の能力を育成するために、デジタルカメラを活用するパッケージを開発する（社団法人日本写真協会、写真・映像教育推進委員会、2006年度版の写真集を参照に研究協力者の支援を得て行う）。

汎用性のあるパッケージの作成には、実験授業や一般化のための授業を数多く行う必要がある。そこで、石川県教育工学研究会（研究代表者が会長を務める）及びメディア教育振興会（研究分担者が会長を務める）に所属する小学校教員と連携して実証研究を推進する。

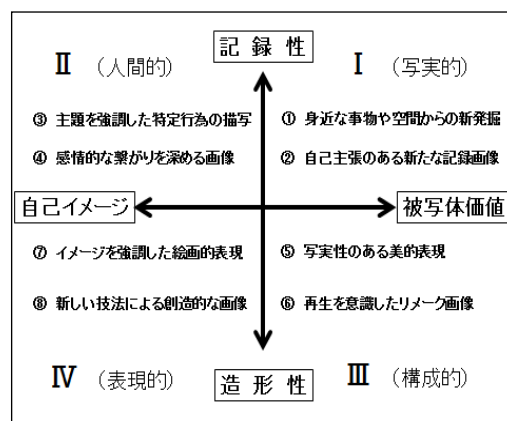
4. 研究成果

初等教育段階でメディアリテラシーを育成するにあたり、NHKデジタル教材の活用

を基本に据えた体系的なパッケージ（3領域（「作り手」「使い手」「作り手」・12視点からなる36パッケージ）を開発・実践・評価を通して有用性を検証した。その結果、国語科の学習指導要領に即してパッケージを開発したにも関わらず、学習成果を記載したワークシートに対する評価と学習指導要録（前年度の国語科の評定）との相関が高くない領域・能力目標が見られた。そこで、「作り手」領域の能力項目を再考し、「伝達」「造形」「記録」の3領域からなる新たな17パッケージを開発した。

テキストブック（作品）の評定結果と前年度の国語科、図工科の学習指導要録の評定との関係を比較した結果、「造形」領域においてのみ、図工科の学力と極めて高い相関が見られた。しかし、作品評価においては、評価者により評定が大きく異なった。また、言語情報に依存する度合いにも相違が見られた。このことは、「造形」領域の作品評価にあたっては、指導者にも一定のコンピテンシーが要求されるともいえる。そこで、以下のような具体目標を4象限に分けて抽出した（図表2）。

図表2 4領域のコンテンポラリー特性



第I象限の具体目標（・魅力的な情景や場面を同定できる。・優れた瞬間を切り取るこ

とができる。・珍しい被写体を同定できる。) 第Ⅱ象限の具体目標 (・主題の強調と省略ができる。・コンピュータ処理ができる。・仕上げ効果を生かすことができる。) 第Ⅲ象限の具体目標 (・造形的な場面を選択することができる。・主題の強調と減産効果を生かすことができる。・独自の美的表現法を主張できる。) 第Ⅳ象限の具体目標 (・独自の視点で被写体をとらえることができる。・新しい加工表現技術を活用することができる。)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計7件)

岡部昌樹:教育メディアの記号次元に焦点をあてた実践的な研究—映像リテラシーを育成する試行授業と成果の応用—, 日本教育メディア学会研究論集, 25号, 2009, 1-6

岡部昌樹 村井万寿夫:現職教員・教育委員会との連携による, 今日的教育課題のカリキュラム開発—メディア教育推進テキストの開発と評価— (中間報告), 金沢星稜大学総合研究所年報, 30号, 2010, 5-8

岡部昌樹:初等教育段階におけるメディアリテラシーの育成と評価—NHKデジタル放送を活用して—, 日本教育メディア研究会論集 Vol.29, 2010, 33-40

岡部昌樹 村井万寿夫:NHKデジタル教材を活用したメディアリテラシー育成カリキュラムの開発とパッケージ評価, 日本教育工学研究報告集, 10-5, 2010, 203-208

岡部昌樹 村井万寿夫, 現職教員・教育委員

会との連携による, 今日的教育課題のカリキュラム開発—メディア教育推進テキストの開発と評価— (最終報告), 金沢星稜大学総合研究所年報, 31巻, 2011, 69-72

岡部昌樹:デジタルカメラを活用して映像表現力を育成する初等向けパッケージの開発, 日本教育メディア研究会論集, Vol.30, 2011, 5-10

岡部昌樹 村井万寿夫:画像リテラシーの育成と評価に関する実証的研究, 金沢星稜大学人間科学研究, 第6巻1号, 2012, 1-6

[学会発表] (計2件)

岡部昌樹:フोटリテラシー育成パッケージを活用した国際交流学習, 009 PC Conference 発表論文集 (CICE学会), 2009年8月9日, 愛媛大学

村井万寿夫 岡部昌樹:Interchange learning between a Japanese elementary school and an overseas elementary school for Japanese children, International Conference for Media in Education. Creative Education Technology for Lifelong Learning Communities (日本教育メディア学会), 2009年8月28日, ソウル大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岡部昌樹

研究者番号: 10319030

(2) 研究分担者

村井万寿夫

研究者番号: 00434465